

# 静岡県地域史研究会報

—静岡県地域史研究会—

## 戸田憲光の討死—松島論文に接して—

小林輝久彦

田原戸田氏当主の弾正忠憲光は、永正三年の駿河今川氏客将伊勢宗瑞の三河侵攻に際し、今川氏に接近して三河国渥美郡今橋城を入手した。続いて憲光は浜名氏の本貫地である浜名神戸一円の管理を今川氏親から委ねられ（静資7四五四）代官斎藤を派遣した。しかし永正五年八月に浜名神戸内の北原山をめぐる大福寺との相論で敗訴し、続く十月に宗瑞の三河国での敗退を聞くことで今川氏を離反した。「宗長日記」によるとのち憲光は三河・遠江国境に位置する今川方の船形山城を落としたものの、今川氏配下の朝比奈泰以に奪還された。「宗長日記」は明確にしていないが、「今川記」及び「今川家譜」は船形山で討ち取られたと記す。

筆者は船形山合戦を永正十四年に比定しているので、松島説について以下の疑問を呈しておきた。まず信用できる「宗長日記」は、憲光が討死したとは記さない。これが正しければ、松島説は立論の前提が崩れる。次に討死を是としても、「善勝書状写」にある大福寺寺領の案件を永正五年八月に落着した北原山の相論に比定してよいか、ということがある。

福寺代表として関与したのは「実相坊」であり（静7一四四二、四四三、四四九、四五〇、四五一、四五二、四五三）、駿河に下向したのも「実相坊」とみられ（静7一四五二）、ささらに「善勝書状写」に「去々年」に大福寺の寺領につき「治部卿」が駿河に下り、福島助春を奏者として今川氏親から判物を受けた案件を、先述の北原山の相論に比定し、この相論が永正五年に決着していることから、「善勝書状写」の年代を永正七年とした。そして憲光は船形山で討死したとされるので、船形山合戦は永正七年に位置づけられるとする（『愛知県公文書館研究紀要』創刊号、二〇一三年）。

筆者は船形山合戦を永正十四年に比定しているので、松島説について以下の疑問を呈しておきた。「田原」とする解釈である。かかる解釈は既に弥永浩二氏が言及しているところであり（『駒沢大学史学論集』二八号、一九九八年。ただし弥永氏は「田原」を憲光の先代の宗光に比定し、討死も明応八年のこととする。）、文脈からしても自然な解釈とも考えられる。ただ筆者には「田原へも被申届候歟」と、続く「今度就打死」との間で文節がいったん途切れてしまうようにも見受けられる。この場合、このたび討死した者の主語

（戸田憲光）が「今度就打死」つまりこのたび討死したと解釈し、さらに「善勝書状写」に「去々年」に大福寺の寺領につき「治部卿」が駿河に下り、福島助春を奏者として今川氏親から判物を受けた案件を、先述の北原山の相論に比定し、この相論が永正五年に決着していることから、「善勝書状写」の年代を永正七年とした。そして憲光は船形山で討死したとされるので、船形山合戦は永正七年に位置づけられるとする（『愛知県公文書館研究紀要』創刊号、二〇一三年）。

第三に、このたび討死した者を「田原」とする解釈である。かかる解釈は既に弥永浩二氏が言及しているところであり（『駒沢大学史学論集』二八号、一九九八年。ただし弥永氏は「田原」を憲光の先代の宗光に比定し、討死も明応八年のこととする。）、文脈からしても自然な解釈とも考えられる。ただ筆者には「田原へも被申届候歟」と、続く「今度就打死」との間で文節がいったん途切れてしまうようにも見受けられる。この場合、このたび討死した者の主語

を「田原」ではなく代官の斎藤とする解釈も成立するのではない。

か。すなわち北原山内の寺領への

違乱を主導した首魁である憲光代

官の斎藤自身が討死したので、

「斎藤方」「おわら方」が大福寺

へ行き「きふく（帰服）」を申し

出たとする理解である。仮に代官

斎藤が存命ならば「斎藤方」と

「方」（仲間・関係人）という表

現をしないのではないだろうか。

この場合「善勝書状写」の年代比

定を松島説に従うと、代官斎藤が

討死したのは永正七年十一月以前

ということになる。当時天龍川以

西地域では大河内備中守が浜松荘

で蜂起し、その北方でも今川方の

堀江城が、大河内と共同する斯波

氏軍勢の攻勢に晒されていた時期

である（静7—五二四、五二

六）。この湖北方面の戦闘に代官

斎藤は、憲光の指示を受けて斯波

方として参戦して討死したのでは

ないだろうか。そうであれば「善

勝書状写」を船形山合戦と関係付

ける必要はなくなると考える。い

ずれの立場からも、松島説の解釈

は弱いと言わざるを得ない。

例会主司名	四百例会
静岡市歴史博物館講座室	二〇一四年刊行の吉川弘文館
『東海の中世史』第一～三巻	『東海の中世史』は、遠江・駿河
廣田浩治・森田泰司	・伊豆を含む東海地域を、畿内近
	国や東国との関係も踏まえながら
	叙述した久々の通史である。今回
	の書評は遠江・駿河・伊豆の論考
	を対象にしぶり、東海全域や畿内
	・東国との関係についても必要な
	限りで論評を行った。『東海の中
史1』は廣田が、『東海の中世	東海地域の中心性や地域差につ
史3』は森田が書評を担当した。	いては言及がないが、強いて言え
『東海の中世史2』は廣田が序・	ば伊勢・尾張・美濃が比較的の中心
一・四を、森田がそれ以外を担当	的な地域と言えようか。しかし畿
した。	内と関東にはされ、その影響を
『東海の中世史1 東海地方の黎	受けた地域であるためか、東海に
明と鎌倉幕府』（生駒孝臣編）	は地域の中心性が希薄であるよう
東海地域を関東や畿内との関わり	に感じた。
で考える観点を示し（本書序）、	冒頭の叙述（一・二・三）が源
北条氏所領の拡大についての叙述	氏平氏・幕府・武士団の叙述に特
がなかつたのは残念であった。	化し、中世社会の基盤としての国
衙領・莊園制の形成過程が本書卷	頭で論じられないことに、最も強
頭で論じられないことに、最も強	い違和感がある。このため諸国の
な性格をうまくまとめていくが、	在地領主を莊園公領制のなかで位
北条氏所領の拡大についての叙述	置づけることができなかつた。東
がなかつたのは残念であった。	海地域の莊園公領制研究の立ち遅
莊園制の叙述（四）はその多彩	れのゆえである。また源氏平氏以
な性格をうまくまとめていくが、	前の中世中期の内乱や群盜蜂起が
遠江・駿河・伊豆については王家	論じられないのも気になつた。な
領・國衙領・在地領主の職の言及	る。幕府成立以後の叙述（二・三）
がみられなかつた。また伊勢・神宮	では、幕府や朝廷との関係の差異
領には公家が給主である莊園や、	により東海の武士に生じた格差の
王家領から神宮領になつた莊園が	指摘は重要である。静岡では伊豆
あり、そうしたことを考えたため	の武士が優位にあり、駿河・遠江
の武士とは大きな格差がある。た	の武士が優位にあり、駿河・遠江
だしこうした格差は東海地域だけ	の武士とは大きな格差がある。た
で考えるのではなく、東海以外に	だしこうした格差は東海地域だけ
所領を与えて進出した武士の	で考えるのではなく、東海以外に
動向もふまえて考えるべきで、そ	所領を与えて進出した武士の
の言及がなかつた。何より北条氏	動向もふまえて考えるべきで、そ
とその被官の勢力の東海と全国で	の言及がなかつた。何より北条氏
の拡大、御家人の北条氏被官化、	とその被官の勢力の東海と全国で
北条氏所領の拡大についての叙述	の拡大、御家人の北条氏被官化、
がなかつたのは残念であった。	北条氏所領の拡大についての叙述

書四・五・六）。『東海の中世史

2』以降に比べて、国ごとの叙述

よりも、東海地域の全体構造の叙

述に力点を置いている。特に鎌倉

幕府が東海地域の武士団やもとよ

り莊園制・寺社秩序・交通に大き

な影響を及ぼしたことが述べられ

ている。

東海地域の中心性や地域差につ

いては言及がないが、強いて言え

ば伊勢・尾張・美濃が比較的の中心

的な地域と言えようか。しかし畿

内と関東にはされ、その影響を

受けた地域であるためか、東海に

は地域の中心性が希薄であるよう

に感じた。

冒頭の叙述（一・二・三）が源

氏平氏・幕府・武士団の叙述に特

化し、中世社会の基盤としての国

衙領・莊園制の形成過程が本書卷

頭で論じられないことに、最も強

い違和感がある。このため諸国の

在地領主を莊園公領制のなかで位

置づけることができなかつた。東

海地域の莊園公領制研究の立ち遅

れのゆえである。また源氏平氏以

お源義朝家人鎌田正清の舅の尾張

長田庄司を駿河長田荘の領主と同

一人とするのは根拠がなく無理で

ある。

幕府成立以後の叙述（二・三）

では、幕府や朝廷との関係の差異

により東海の武士に生じた格差の

指摘は重要である。静岡では伊豆

の武士が優位にあり、駿河・遠江

の武士とは大きな格差がある。た

だしこうした格差は東海地域だけ

で考えるのではなく、東海以外に

所領を与えて進出した武士の

動向もふまえて考えるべきで、そ

の言及がなかつた。何より北条氏

とその被官の勢力の東海と全国で

の拡大、御家人の北条氏被官化、

北条氏所領の拡大についての叙述

がなかつたのは残念であった。

莊園制の叙述（四）はその多彩

な性格をうまくまとめているが、

遠江・駿河・伊豆については王家

領・國衙領・在地領主の職の言及

がみられなかつた。また伊勢・神宮

領には公家が給主である莊園や、

王家領から神宮領になつた莊園が

あり、そうしたことを考えたため

都市領主の関係史は、本書では薄かつた。

寺社の叙述（五）では後の駿河七觀音の寺々が「国衙の寺」として論じられる。駿河国による寺院編成の指摘として重要である。交通海運の叙述（六）も多彩な交通のあり方を論じており、遠隔地交通（志摩・三河・駿河）とともに、交通ネットワークの本質が分節的であることを指摘する。分節的な交通は国衙の市などを中心にした面的な経済圏になり得るのか、またが分節的な交通が「線」でつながり遠隔地交通になる場合、その「線」に具体的にどのような施設・関係・システムが構築されるのかが、さらなる課題であろう。またここでも北条氏所領の拡大により交通ネットワークを受けたことが想定される。

『東海の中世史2 足利一門と動乱の東海』（谷口雄太編）前巻とは異なり、国・地域別の政治史叙述と政治史以外の叙述で構成され、次巻以後も本書の構成を踏襲している。国単位の叙述は詳しくなっているが、東海地域全

体の政治秩序や経済・交通の叙述は薄くなっている。ただし南北朝内乱を扱う本書は、足利一門の全国展開や幕府の政治抗争史といつて東海地域を超える叙述を盛り込んでいる。とはいへ前巻のような武家政権の東海道全体の支配編成、特に内乱期固有の重要な問題としての半濟令や莊園政策・立法などは言及すべきだったのではない。あと本書では伊豆についての内乱・政治史・支配構造の叙述がなかったも残念であった。

足利氏と三河の叙述（序・一）は、足利氏の基盤となつた三河について、鎌倉期からの足利氏の展開、南北朝内乱での三河吉良氏の動向を描く。足利氏の東海道の拠点としての三河の重要性、足利一門守護の東海道諸国配置、吉良氏の遠江進出を論じ、二河を中心にはあるが本書の冒頭として東海道の情勢を俯瞰した叙述がなされる。鎌倉末期の三河についても北条氏所領が拡大していることや、北条氏所領が足利氏・吉良氏に継承されるのかどうか、言及が欲しかった。また鎌倉・京都での吉良

氏の活動の言及がないが、吉良氏には都市領主としての性格はないのかどうか。また足利氏執事（仁木・斯波・細川）と三河のつながりを指摘されるが、具体的なあり方が不明であった。

今川氏の叙述（四）は、範囲以後の今川氏が駿河・遠江守護というだけではなく、在京幕府軍の一員として畿内でも出陣し、在京の有力幕閣であつたことが論じられる。また侍所頭人・引付頭人となつた貞世（了俊）を家嫡とする。

山陰地方の守護今川頼貞にも言及し、今川氏の全盛時代を南北朝期に見出す。これまでの今川氏研究で見落とされてきた新たな提起が、東海地域を超えて様々に述べられている。

## 六 東海地域の神宗

地方寺院の創建・経営には在地有力者

（齋藤夏采氏執筆）が担った。先に挙げた寺院でいと、実相寺の吉良氏、吉良氏は遠江国碧沼寺の壇越でもある。方広寺の奥山氏、清見寺は興津氏。吉良氏は遠江国碧沼寺の壇越でもある。なぜか聖武天皇繪屏を所蔵している。また上岐氏の庇護の元園居した万里

は信憑性に問題がある「難太平記」だけでなく、古文書史料にもとづいて南北朝期今川氏の展開を見直す必要がある。

五 東海地域と顕密化教—三宝院流の展開を中心とした池勝也氏執筆分担

猿投神社は陶器生産としても有名な地であるので、陶器生産と宗教の関連を考察してはしかつた。

ただ、この猿投神社と前掲した真禪寺は比較的近く、京都と鎌倉の中間点でもある。やはり東西交流の活発化によつてもたらされたものだろ。

太田道灌の招きによって、江戸まで旅をしている。その宿泊地も、清見寺に泊まっている。

#### 第一卷の小括

第一卷を概観して、今までの知識である、天台・真言宗・鎌倉仏教、静岡県は特に、権宗といった、図式が成り立たないことがよく分かった。現在でも現世利益で繁昌している岩手寺や小国神社など、真言宗寺院は多い。神仏分离の中で、各階層の人々は、何を求めていたかを史料からきちんと位置付ける必要を感じた。

#### 第二卷

一 駿河・遠江の守護・奉公衆・国人  
杉山一弥氏執筆担当

これは、家水遵嗣氏の説くように、東幕府軍（細川政元）に命じられた、奉公衆の横地・勝田両氏によって、塙貢坂（菊川市）で討たれた。杉山氏が説くように、南北朝期に見られた今川氏の守護代

（高木氏・長瀬氏など）は見えてなつていい。だからと言つて、決して守護権力が強かつたわけではないと思われる。康正年（一四五八）に起きた引間市土倉一揆にしても、鎌倉府討滅のために、斯波（波川）義範が、遠江を軍兵の草刈り場としたために、兵糧米の値が吊り上がりたからであり、混乱を極めた。斯波

氏は、幕府の先兵として、関東を攻めると、いうポーツを示しながら、結局行わなかったため、斯波氏の管領としての権威も地に落ちた。杉山氏は、奉公衆として、横地・勝田氏を説明しつつも、別の頁では、有力国人として、今川氏の遠江侵入に対する、あくまで私的の反発したとしている。家水遵嗣氏の、応仁・文明の乱における東幕府軍内の対立として、管領細川政元に命じられて、今川義忠を討つたという説を考慮していない。評価すべきは、一色氏の海を支配であり、渥美郡の分郡守護を得たのみならず、知多半島・伊勢と太平洋岸及び日本海までも触手を延ばしたことと、美濃を証している。尾張守護として、今川仲秋と法珍の名が見える。わずか数年の補任ではあつたが、なぜそこに今川が入つたかの考察がない。

#### 五 東海の神祇と信仰 山田雄司氏執筆担当

現在の白山神社は、岐阜県が最も多く五五社を数え、静岡県は五社、全国で士番目に多い数である（森田執筆『福井町史』）。特に遠江には多く見られる。近世になると、山権定といつて、白山・立山・富士の巡歴も行われた。富士信仰は、最も静岡県及び山梨県に

れ、中世では、足利義満・義教の富士遊覧が注目される。都の人にとって、富士山は憧れの場所だったためである。一般でも、富士山集丸は、関東に向かう一つの目的は、富士山を見ることであり、富士山を初めて見た集丸は、かぶつた笠を投げ打つて驚いている（『梅花無尽藏』・森田執筆『富洋町史』）。

#### 第三卷の小括

ここで、問題とするのは、杉山氏の今川氏に対する評価である。すなわち、今川範忠以降、守護在国が命じられ、それによって、家臣団を強化したことが、戦国大名化に進んだということである。果たして、そこである。

して、そこである。

今川氏親は、義忠死後、風前灯だったので、

あり、伊勢盛時（後の北条重時）がいなかつたら、とつぐに謀殺され

れていたのである。森

田は、伊勢盛時の京都

情報と権力の低下はな

は、だしい幕府の有様を見

て、幕府に従つて、

はなく、幕府を利用す

る方に方針転換がなさ

れたから戦国大名化できたのではない

か」と見る。

#### 【例会案内】

☆七月例会  
一、日 時 七月二十六日（土）午後二時～

二、会 場 静岡県教育会館 D 会議室

三、報告書名及び報告書名  
〔安政東海地震後の今切渡海路の復旧について（仮）〕

岡崎佐也氏（東洋大学大学院博士後期課程）  
〔事務局より〕

例年通り、午後 時より幹事会を行  
います。会長並びに顧問・幹事は、出席  
願います。また欠席される方は必ず  
連絡下さい。

〔安政東海地震後の今切渡海路の復旧に  
ついて（仮）〕

岡崎佐也氏（東洋大学大学院博士後期課程）  
〔事務局より〕

例年通り、午後 時より幹事会を行  
います。会長並びに顧問・幹事は、出席  
願います。また欠席される方は必ず  
連絡下さい。

## 静岡県地域史研究会報

第261号

2025年7月5日発行

## 静岡県地域史研究会

<https://www.shizuoka-chiikishi.jp/>

<shizuokachiikishikenkyukai@gmail.com>

会長 小和田哲男

事務局長 森田香司 (090) 7023-0733

会計担当 北村 啓 (090) 4230-6530

[会費納入先]

北村啓気付

郵便振替口座 00880-3-63062

年会費 3000円

